

# 平成 31 年度第 1 回大船渡市協働のまちづくり検討委員会 議事録

## 1 日時及び場所

- (1) 日時 平成 31 年 4 月 25 日（木）午後 1 時 30 分から午後 3 時 30 分まで
- (2) 場所 大船渡市防災観光交流センター（おおふなぼーと） 会議室

## 2 出席者

- (1) 委員 7 名 吉野英岐 若菜千穂 千田尚順 木下雄太 金野敏夫  
遠藤和枝 金野高之
- (2) 事務局 6 名 企画政策部市民協働準備室  
次長 新沼晶彦、主幹 菊地 正展、主事 平野 桃子  
生活福祉部地域包括ケア推進室 主幹 鈴木弥生  
教育委員会事務局生涯学習課 課長補佐 新沼裕一  
中央公民館 館長補佐 吉田清喜

## 3 議事の経過

### (1) 開 会

### (2) 委員長あいさつ

吉野委員長より、「公民館、協働のまちづくりは地域にとっての『要』になる。様々な意見を委員の皆さまから出していただきながら、拙速にならないように進めて行きたいと思っているので引き続きよろしくお願ひしたい。自分自身が市外から来ていることもあり、現地の公民館を実際に見て、現場の状況等、さまざま勉強させていただきながら検討を進めたい。」とあいさつがあった。

### (3) 前回の振り返り

### (4) 協議

以下について、資料に基づき事務局より要点を説明し、内容について協議を行った。

- ① 市内各地区の状況について
- ② 先進事例紹介（若菜委員より）
- ③ 今後の地区のあり方について

### (5) その他

次回委員会を 6 月上旬または下旬頃に設定することとした。

### (6) 閉 会

## 4 協議内容（要旨）

### ①市内各地区の状況について

千田委員)

- ・協議に入る前に、これからの討議のしかたについて、今後地域がどうあればよいかというところに焦点を絞って話し合いを進めていくが、その前に、まちづくりにかかわる市全体の問題点が何かを把握することが重要だと考えている。地方全体の衰退と地域の衰退は密接に関係しているの

で、地方全体が衰退していくことの原因は何かということをおこの場でも共有していかないと、地域のあり方は議論できないのではないかと思う。地域という末端のあり方だけを議論してもだめだと思ふ。市全体、地方全体として、何が地域づくりの問題としてかかわっているのかを確認しながら討議に入っていくほうが良いのではないかと思ふ。

遠藤委員)

- ・市全体の課題について市が整理した資料がある。次回以降それを基に市としての課題やそれに対する取り組みを説明し、共通認識を図るということで共有することでおいかか。

吉野委員長)

- ・次回以降共有してもらふこととしたい。
- ・この会議は協働のまちづくりが一つの大きなテーマになる。協働を考ふる上では複数の関係者の協力、連携がキーワードになると思ふ。
- ・行政が建物や人、予算を用意してきた時代は確かにあるが、今は行政だけの力でまちづくりを推進していくことは難しい。市民の主体性をどう作っていくか、育てていくかということをお考ふる時期に来ている。
- ・協働の中身、メンバーは地域ごとにお変わると思ふが行政だけ、住民だけで何かを行ふということではなく、連携、協働しながらまちづくりを進めていく。
- ・これまでも公民館がそういった性質をもつ活動をしてきたという歴史、実績がある。それをまったく見直さず続けることができるのかということおそうではないと思ふ。まちづくりは社会教育だけではなく、さまざまな分野を含む広い概念である。従来どおりの公民館でその広いエリアをカバーしきれぬのかどうかということが、あちこちで議論されており、大船渡においても地区公民館、地域公民館について情報を共有しながら、これまでの財産を生かしつつどのように進めていくのかということをお議論できればよいと思っているがよいだろうか。
- ・前回はこれまでの状況、現状について委員の皆さんからお考えをいただいた。そうはいつでも現場の声というものが大切だと思ふので、今回の資料で共有したい。

千田委員)

- ・震災後館長、主事の仕事をものすごく増えている。
- ・自分は赤崎公民館を頻繁に訪れているが、いつも 21 時を過ぎても館長、主事が仕事をしている。これでは誰もやりたがらないのは当然で、後継者探しは本当に大変だろうと思ふ。特にも赤崎は公民館の移転でもものすごく忙しいと聞いた。
- ・日頃市も、館長から忙しいと聞く。助け合い協議会の仕事もやらなければならないので、まちづくりもやりたいが、なかなか手が回らないと聞いている。助け合い協議会について、館長や主事がコーディネーターになったり事務局になったりしているが、これはものすごく大きな負担だと思ふ。役割を分離させるべきだと思ふ。

木下委員)

- ・公民館利用者の年代を聞きたい。

事務局 (吉田補佐)

- ・大船渡地区公民館では、昼は老人クラブの活動、夜は一般の方で構成されるスポーツ団体の利用が多い。猪川地区館も同様であるが、ここは第一中学校の部活動で週 2、3 回は利用されている。立根地区館ではスポーツ少年団、高齢者サークルによる体操クラブの活動で頻繁に利用されている。

木下委員)

- ・ 体育施設があるところは比較的若者が多く、そうでないところでは高齢の方が多いいということか。
- ・ 資料を見ても高齢者向けの行事が多いように思う。若者が参加しづらい行事が多いと一住民としてもそう思う。
- ・ 地区公民館が何をしているのかわからないし、そもそも必要なのか？とっていた。関わる人は大変な状況にあるようだが、関わっていない人はそれがわからないし、必要なことをやっているのか疑問に思ってしまった。
- ・ 住民が必要だと思う活動と、行政が必要だと思う活動のバランスが取れていないのではないかと。そのあたりが可視化されると本当に地区としてやるべきことが見えてくるのではないかと。

吉野委員長)

- ・ 盛町では地区公民館より地域公民館の方がなじみがあるのか。

木下委員)

- ・ 盛町は毎年地域公民館単位で七夕祭りをやっているの、そういったところで若い人が関わりやすいが、地区となると接点がない。

吉野委員長)

- ・ 接点が多い人とまったくいない人がいるのが現状ではないかということか。そのあたりの現状で何か知っていることがある人はいないか。

金野(高)委員)

- ・ 赤崎では、昔は「灯ろう」を地域公民館単位で作っていたが、震災後やらなくなった。今、地域活動が非常に少なくなっている。地域全体の活動といえば一斉清掃くらいではないか。
- ・ 一住人とすれば地区公民館との直接的な繋がりはない。町民運動会、敬老会といえば地区公民館で音頭をとっていて、それに地域として参加するという意識はあると思うが、一般の人は地区公民館が何をしているのか直接的にわかっている人はそう多くはないのではないかと。
- ・ 地域内の人間関係が希薄になってきていると感じる。

金野(敏)委員)

- ・ 陸前高田市の場合は、毎月自治公民館内で定例会を開いている。常に集まるのは全世帯の半分くらい。その場で、困りごとを共有したり草刈の予定を立てたり、健康についての勉強会をしようとか、そういった話し合いをしており、地域の繋がり強いように思う。
- ・ 地区との関係で言えば、地区要望しようとかいう話になれば自治公民館長のような人しか関わらないので一般の人は接点が少ない。
- ・ 地区との協働を議論するに当たり、地区が地域とどうかかわるかということもとても大切だと思う。

千田委員)

- ・ 日頃市地区は行事がなくなっていった。運動会がなくなった。原因は高齢化、地域で選手を出せなくなった。
- ・ 自分たちで収穫した作物、手芸品などを住民たちが集まって売ったり食べたりするお祭りがあったが、発起人であった有志が高齢になり、継続できなくなった。後継者を育ててなかったのでも続かなかった。この祭りを公民館で引継ぐという話もスムーズに行かず、だめになってしまった。

- ・共通する原因はリーダーの高齢化と、次世代への引継ぎがうまくできなかったこと。これにより賑わいがなくなってしまった。
- ・既に農協がなくなっているし、来年度には中学校もなくなる。公共的な施設が減り、不便になった。この影響は大きい。
- ・地域と子どものつながりが少なくなっていることは、まちづくりを進める上でも大きなマイナス要因だと思っている。

吉野委員長)

- ・人口に対する地域公民館の数が日頃市は 1,822 人に対し 13 館、猪川は 4,278 人に対し 12 館と多くなっている。
- ・日頃市町は面積が大きいので地域公民館が点在しており、1 地域の居住者数は少ない。同じ市内でも別なところとは大きく違う。

事務局 (新沼次長)

- ・同じ地区内でも状況は異なる。200 以上の世帯がある地域もあれば 10 世帯程度の地域もある。
- ・吉浜地区だと、地域の独立性が強いようだ。

木下委員)

- ・日頃市町は、小さな集落内の人がほぼ親戚同士である場合があり、親戚関係で助け合いがされている。この点は盛町と異なる。

事務局 (新沼補佐)

- ・大船渡地区では、地域対抗バレー、防犯野球など人が集まる機会が多かったが徐々に減り、それに拍車をかけたのが震災だった。
- ・役員をやりたいくないので集まりには行きたくないという人が増えているように思う。人の上にたつことを避けていることも参加者が減少する要因かと思う。
- ・消防団もなかなか入ってもらえない状況がある。
- ・地区館長をやるのは学校の先生だった人、市職員 OB などがなることが多いし、そういった人がやむを得ず引き受けているように見受けられる。

吉野委員長)

- ・高齢化、多忙化により地域のことまで手が回らない人も多くいるということだと思う。そういった話を聞けば聞くほど、このままでいいのかを考えなければならないように思う。
- ・手持ちの財産、手持ちの人材でうまく地域を回していく仕組みを考えなければならない。そうしないと、役員をやった人だけが辛くなってしまっているというのが多くの地区の共通点だと思う。

## ② 先進事例紹介 (若菜委員より)

吉野委員長)

- ・地区運営組織と地域包括とで関係はあるのか?

若菜委員)

- ・地域包括ケアの動きがここ 2、3 年で始まったものなので、先進地では地域運営組織に地域包括ケアが組み込まれた。遠野では、1 地区公民館に地域包括ケア系のコーディネーター (館長ではない) を派遣している。地域包括ケアの取り組みと地区運営組織の動きは非常に関連が強い

ので一緒にやったほうが良いと思う。

吉野委員長)

- ・大船渡ではコーディネーターの役を館長や主事が担っていることが課題のようだ。

若菜委員)

- ・他のところだと館長やセンター長はもう少し上の人で、実際の事務局長は別にいて、その方に対しては指定管理の人件費がきちんと入っている。大船渡の報酬が薄いという点は是非メスを入れてほしい。

事務局（鈴木補佐）

- ・館長、主事が忙しいのは理解しており、他の人に担ってもらってよい役割だと考えてはいるが、結局なり手がなから館長がやっている。
- ・特定の方に負担をかけたくないとおもってはいるが実情がそうである。
- ・大船渡のすごいところは、よその自治体だとコーディネーターは社会福祉協議会職員などがやっているが、ほぼほぼ住民がその役割を担っていること。
- ・初めは館長がコーディネーターだったが、代替わりで別な方がその役割を担うという地区もあった。
- ・担い手を作らなければならないというのはどの地区でも課題にはしているのだから、その点を何かサポートできればと思っている。
- ・昨年度、コーディネーター同士の連絡会議を立ち上げた。今年はさらにそこを充実させたいと考えていて、コーディネーターを孤立させないよう、同じ役割の方同士で顔が見えて、情報交換できる体制を強化していく方向で進めており、勉強会や課題共有の場を設けることも予定している。

千田委員)

- ・波多地区の協議会の体制を日頃市地区でも比較的スムーズに実現できそうだったと思った。日頃市地区においては、このままでは集落が消滅するという危機感はそれぞれが持っていると思う。波多地区などではその危機感があつた上で組織を立ち上げていったのか、立ち上げの経緯はどのようなものだったのかを教えてください。

若菜委員)

- ・3年間かけて、ワークショップなどをしながらそれぞれの意見を出し、考えをまとめた。意見の取りまとめに行政も協力はしたが、地域も主体的に参画した。
- ・きちんと場を設け、きちんと話し合えば若い人たちも動き始めることができる。若い人たちの方が危機感が強いところもある。そういう機会を地域で作ってもらえればと思うが、地域任せだと負担感が大きいので、行政に上手にサポートしてほしい。

事務局（新沼補佐）

- ・今危機感が強いのが、郷土芸能の伝承。今、小学校の授業でやっている郷土芸能が、小学校が統廃合となったときにきちんと続くのか不安がある。

千田委員)

- ・必要性を感じている住人をどうやって動かすか、仕掛け人になる人、リーダーになる人が必要だと思う。その役割は今の地区館長かと思う。その人たちが住民に働きかけて、地区にとって本当に必要なものは何かを全体で討議して、最終的にそういう組織を作ろうという気持ちに持っていければよい。

木下委員)

- ・「地域を考えよう」、のようなテーマのもと地区単位で話し合いの場を持ったときに、自分は若い人が来るイメージがない。先進地では、地域を考えるとといったようなテーマで話し合いの場を持ったのか、学校の統廃合とか、スクールバスとか、カテゴリを分けて話し合いの場を設けながらそれらを束ねていったのか、そのあたりが聞きたい。

若菜委員)

- ・自分が関わっている事例で言えば、学校とかスクールバスといったようなテーマで話し合いをするとどうしても行政でやってよという話に集中してしまうのであまりよくない。
- ・館長の力量にもよるが、若い人 1/3、女性 1/3、そのほか 1/3 でやると話し合いがしやすい。各地域公民館にその人数を指定して最初は動員により人を集めた。それでは地域公民館の負担が大きいと判断した場合は、PTA、婦人部など既存の地域内組織から何人ずつ出してもらおうというようなやり方をとった。
- ・最初はテーマを絞らずに、各世代のどの地域の人がどういう思いで暮らしているのか、お互いを知ることが大切だと思う。

木下委員)

- ・楽しく集まることから始めるべきか、義務感で集まることから始めるべきか。

若菜委員)

- ・地域によると思う。明確に地域に課題がある場合はその話題から入っていく。明確な課題がない場合の話題は地域によると思うし、そのあたりの下調べが大切だと思う。

千田委員)

- ・女性の地域参加が大切だと思う。女性にしかない視点で問題提起をしてほしい。

若菜委員)

- ・地域づくりにかかわる中で、たとえば子ども食堂をやろうという話になると、女性はすぐに実現させる。男性は予算はどうだとか、人が来なかったらどうするとか言ってなかなか話が進まない。スタートダッシュは女性のほうが強い。でも5年、10年と活動を継続していくのは男性が上手。男性は、ひと段落ついた後も、工夫して新たな展開を作ろうという粘り強さ、継続する力がある。そういう意味でも、男性と女性のバランスや一緒に関わることは大切だと思う。

### ③ 今後の地区のあり方について

若菜委員)

- ・前段の説明、これまでの議論を踏まえて資料3を見たときに足りないものは、負担感を減らすための解決策が示されていないこと。
- ・今の公民館が大変なのは、建物管理、生涯学習事業、助け合い協議会、市からの動員への対応、この4つの役割が大きすぎて既に忙殺されてしまっているところに、さらに地域づくりという仕事が入ってくる。これをどう受け止めたらいいのかという解決策をもう少し議論しないと、地域に持っていってもうまく行かないと思う。その議論をするのがまさにこの検討委員会だと思う。
- ・今年度地域に入ったとしても、それはモデル的なものなので、この場で考えた解決策が適するかどうかの協議もしながら進める必要があるのではないか。

- ・地区運営組織の結成に向けてというところで、負担感の解消方法について説明してほしい。
- ・特に自分が考えてほしいと思うのが、建物管理。地区運営というからには、そこでカフェをしたい人がいればやらせていいのか、児童館やってもいいのか、どの程度の自由度を持たせるかは地区運営組織に非常に大きく関わってくる。
- ・北上市、花巻市は指定管理における建物管理の規定がとても細かく、結局それに忙殺されている。
- ・雲南市の場合は、地域運営組織の長が決めていいという規定があるため、建物が柔軟に利用されている。そのあたりについてもこの場で議論していかないといけない。
- ・今のままで地域に入らないほうが良いと私は思う。

吉野委員長)

- ・適正な業務にするために必要な仕組みは何かを考える必要がある。公民館制度から地区運営組織制度に移行し、地域の主体性を尊重する運営方式をとれないかということだと思うが、それにより本当に負担感が減るのか、そのあたりがまだはつきりしないように思う。

遠藤委員)

- ・昨年度はじめに各地区館を回って先進事例などを紹介した際に、「人とお金がなければそのようなことは実現できない、かえって業務が増えるだけだ」と各地区館からいわれた。今の負担感を解決する術をその場でお示ししなかったからそう思われたのだと思う。
- ・負担感を減らすための解決策がこの取組みであることを地区に対して説明していかないと、地区では受け入れてもらえないと改めて感じた。

吉野委員長)

- ・これ以上特定のポジションの方に負担がかからないように、どのようにして住民で分担していくかをこの場の全員で考えて行きたい。

金野(敏)委員)

- ・協働のまちづくりを検討するに当たり、最終的に地域の意見が反映され、地区の問題が解消するという流れになっていくのかと考えたときに、これまでは行政の機関の一つとして市と地区との繋がりがあったが、行政と「地域の集合体としての地区」との繋がりはあまりなかったといえる。
- ・今後地区運営組織に移行すると、「地域の集合体としての地区」の役割もその組織の中に入ってくるので、市と地域との直接的な繋がりができると考えられる。
- ・これまで地区公民館が担ってきたまちづくり推進員としての役割や、助け合い協議会としての役割を地区運営組織が内包するならば、新たにそういう組織の上乗せはなくなるのだなと思った。
- ・各部会に、専門的知識がある人が入ればよりよいように思う。具体的には、福祉部会のような部門には例えばコミュニティソーシャルワーカーとか社会福祉協議会の職員のようなある程度専門的知識のある人を各地区に一人ずつくらい配置するとかできれば、地域福祉の増進が図られるのではないかと。
- ・今日の事例をみて、事務局の中により各部門の専門的知識がある人がいると良いように思った。

吉野委員長)

- ・まだ形の話しかできていないので、中身はこれからの話。

- ・地域との関係性はどのように見ていくのか、今回は地区の形を変える話だが、地区と地域とがこれまで関係があったのかどうか、地域から地区公民館に運営資金が提供されているのかとか、財源がどうかという問題もある。

金野(敏)委員)

- ・費用面はこれからの課題の一つ。これまでいろんな組織で重複して支出してきた資金を整理、再配分、あるいは追加配分することで、事務局がうまくまわるようにどこまでできるかを考えていく必要がある。

千田委員)

- ・地区によっては独自財源がないところもあるという話だったのは初耳だった。平山地域では一人当たり 1,000 円納めているが、地域によって違う。
- ・集落支援員がいると聞いている、この役割は何か？

事務局 (新沼次長)

- ・今年度は専任の集落支援員が 4 人いる。昨年度はモデルの 2 地区のみに入っていたが、今年から 11 地区に入っている。最終的には地区のあり方についての話し合いの手伝いができればいいと思っているが、今年度初めて行く地区もあるため、4 月、5 月は地区を知ること、顔を覚えてもらうことを目標として動いてもらっている。その後で次のステップにいきたいと思っている。

吉野委員長)

- ・財源、組織、目的、地域や地区との関係など詰めていくべき議題がたくさんある。
- ・公民館は法律に基づいてやっているのだから、法令的な部分はどこまでクリアできるのか、具体的には公民館に自販機を置いてよいのかという話になると思う。

事務局 (吉田補佐)

- ・行政財産使用許可の目的外使用という形で認めている例はある。営利を目的とする物販等は社会教育法の規定上、地区公民館ではできない。

吉野委員長)

- ・現状では、住民が自由に何かやりたいといっても社会教育法の関係でできることとできないことがあるということか。地区館は毎日開館しているのか。

事務局 (吉田補佐)

- ・365 日午前 9 時から午後 9 時まで開館することとなっているが、地区館ごとにそれぞれ管理方法が異なる。市の直営館については、年末年始とお盆期間中は休館日としており、大船渡地区公民館については、毎週月曜日も休館としている。
- ・指定管理の中央公民館、三陸公民館は民間に管理をお任せしているのでそのとおりの運用。
- ・大船渡地区館は使用者がいる間中、館長や管理人さんがずっと地区館にいて、事故等があった際にすぐ対応できるようにしている。
- ・一方では、鍵を管理する方がいて、施設使用者に鍵を貸し出し、使用者が使用後施錠し、鍵を返却するというやり方をしているところもある。

吉野委員長)

- ・11 地区の利用規定を委員全員が知っていることではないが、新しい仕組みを提案していくとなれば、現状 11 地区が一定のルールの中でどう運営しているか、利用状況がどうなのかを知る必要がある。



- ・何とかなっているところとなっていないところ、そのあたりの事実関係を示していただいて、共有し、困っていることを洗い出した上で、どうしたら解決できるのかを考え、仕組みづくりなら何からできるのかというところを、さらに次回以降は議論を深めていきたい。
- ・全体的には地区公民館についての新しい運営方法についての提案をベースに議論して行きたい。

若菜委員)

- ・現状を把握することはもちろんだが、どこまでを地域判断に委ねるかというところの明確なラインを整理する必要がある。国で決めていることとは別に市の条例で決めていることがあるはずで、条例を変えればここまでできる、ということもあると思う。そのあたりの明確な整理をしないと地域が混乱すると思う。
- ・地域に入る前に、この資料で説明に行きたいというものをこの場でチェック、ブラッシュアップすることが必要だと思う。